

寶卷と明清の民間信仰 — 目連傳承を中心として

小南一郎
(京都大學)

中國撰述の佛典と推測される『佛說盂蘭盆經』に起源する、中國における目連傳承は、佛教傳説という範圍を越えて獨自に展開をし、敦煌で發見された文書の一つ、『大目乾連冥間救母變文』に、ひとまずの結實をした。慳貪の心の深い目連の母親は、その報いとして餓鬼道に墜ちるとというのが元來の筋書きであったはずであるが、『目連變文』においては、目連の母親は阿鼻地獄に墜ちたとされ、その母親を求めて地獄を遍歴する目連の姿が、語り物文藝の形式で、詳細に描寫されているのである。

目連傳説は、敦煌における文藝の中で、一定の完成を見せたあと、それまでとは異なった文藝の基調をもって、新しい方向へと展開をし、現在にまでつながっている。宋代にも目連をめぐる傳承文藝が盛んに行なわれていたであろうことは、『東京夢華録』などの、當時の都市の繁盛記を通してうかがうことができる。ただ、具體的にいかなる筋書きのものであったのかを知ることができる資料はほとんど遺ってはいない。そうした資料や實際の作品が遺るのは、元代以降、とくに明清時期になってからなのである。目連傳承は、元來から死者救済の儀禮と密接に關連しつつ展開して來たと考えられるが、その傳承と死者との關係は、むしろ明清時期になった方が、よりあからさまに示されるようになる。

この時期において、目連傳承を文藝化し、作品として定着させる枠組みとなったのは、演劇と語り物文藝とであった。演劇としては、明の鄭之珍『目連救母勸善戲文』が代表的な作品であって、それ以後の目連をめぐる傳承は、多かれ少なかれ、みな、この作品の影響を被っていると言ってよいであろう。一方、語り物文藝としては、いく種類かの目連寶卷が遺されている。寶卷文藝は、敦煌の變文のあとを承けた、佛教的な語り物文藝だと位置づけられているが、兩者の間には、相當に異なる要素があることも無視してはならないであろう。そうした質的な相違の中に、中國近世社會の特徴的な構造が反映されているの考えられるのである。

小南一郎 KOMINAMI Ichirō

1942年生

京都大學人文科學研究所教授 文學博士 (京都大學)

主要著作 『楚辭とその注釋者たち』 『西王母と七夕傳承』 『中國の神話と物語り』 「『盂蘭盆經』から『目連變文』へ — 講經と語り物文藝の間」 『中國の禮制と禮學』 (編著) ほか多數